霊夢とフランのお遊戯会

VETTEL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
霊夢とフランのお遊戯会

【Ｎコード】
Ｎ３１６６Ｚ

【作者名】
ＶＥＴＴＥＬ

【あらすじ】
呼び出されて向かった先にはかつて戦った少女がいた。そして楽しくも激しい「お遊び」が始まるのであった・・・。

――紅魔館地下部屋の前に私はいた。悪魔の妹と再び会うために。以前は出会い頭に戦うことになったが今回はどうだろうか。彼女の姉であるレミリアに呼ばれて来たのだがどうもレミリアの様子がおかしかった。なんというか…顔を赤らめているような感じだった。

そんなことはさておき、扉をゆっくりと開ける。ギィィと音を立て重く、そして身の丈の数倍もの大きさの扉が開く。開いた先にはボロボロになったぬいぐるみ、そして七色の結晶を下げたあまりにも不格好な羽根を広げた紅い服の少女。彼女こそが悪魔の妹「フランドール・スカーレット」である。果たして何があったのか。レミリアが呼んでくるほどだからよっぽどのことがあったのだろう。

「あらフラン、久しぶりね」

「霊夢！久しぶり！」

無邪気で幼い笑みを浮かべ、こちらへ一気に駆け寄ってくる。吸血鬼のパワーは恐ろしいものだ。以前戦ったときに身を持って思い知らされた。怪我をしないよう身構えたが、その努力はその直後水の泡となった。ふわりとフランが抱きついてきたのだ。

「力のコントロールできるようになったのね」

「霊夢を傷つけたくないもん、練習したんだよ！」

「そう……」

彼女と以前戦ったときはボロボロになった。そこから学習したのだろう。多分。

少しフランと話した後、本題を切り出した。

「ねぇフラン？どうして呼んできたの？」

「んっ、また遊んで欲しかったの。お姉さまじゃ相手にならなかったからね」

「仕方ないわねぇ…手加減してよね。ボロボロになるのは嫌だから」

「分かった！じゃあ……いくよ！」
始まった。私は御札を構え、突撃してくるフランの前に結界を張る。天狗よりも速いと言われる吸血鬼の猛突撃だ、まずは防御しなければこちらが文字通り吹き飛んでしまう。フランが結界にぶつかる。頭を抱えて痛がっているがとてつもないスピードで突っ込んできたのにその程度のダメージで済むのは吸血鬼の頑丈さを物語っている。
フランが攻め、私が守るという展開がしばらく続いた。防戦一方じゃいくら遊びとはいえ勝機がない。スペルカードを構える。
『神技「八方龍殺陣」』
それをかざした瞬間私を中心にして全方位に御札が放たれる。特定の隙間しか無く、その隙間は常に動く。限られた範囲でしか動けない中に追い討ちをかけるように陰陽玉と楔弾を放つ。私の技の中でも屈指の強さを誇るこの弾幕をフランは驚きながら、だが華麗に避けている。時々当たりそうになるが必死で避けた。そして隙間が大きくなったときフランは自らの能力を使った。
「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」
その能力を使い私の手元のスペルカードを破壊した。粉々に砕け散った瞬間、フランは誇らしげに笑った。それを見て私もやられたわね、と呟いて薄っすらと笑みを浮かべる。そう、これは遊びなのだ。楽しくなければならない。美しくなければならない。
攻守交替と言わんばかりにフランがスペルカードをかざす。
『禁忌「フォービドゥンフルーツ」』
斜めから波紋状の弾幕が取り囲むように迫ってくる。ちょうど全ての波紋がぶつかり合う地点にフラン、そして私がいた。お互いの心情が読み取れるぐらいには近い。フランの顔を見ると楽しそうだ。だがこっちはそんな余裕は無い、すぐそこまで弾幕が迫ってきて漸く弾幕の間隔が通れるぐらいに広がった。そうして避けきった…と思ったら今度はフラン自身まで波紋状の弾幕を打ってきた。これではどうしようもない。とっさに防御用のスペルカードを使う。

『夢符「封魔陣」』
弾幕を掻き消すように結界が広がり、フランの弾幕はほぼ消え去った。残った弾幕も当たらない。
「えー、なんで消しちゃうのさー……うー……」
「消さなきゃ危なかったから、負けるのは嫌だし」
フランが抗議してきたがそこはまぁ勝負ということで丸く収めた。
仕方ない、という感じで軽めに御札を飛ばしたがちょっとやる気なさげに避けられてしまった。フランも対抗するように円状の弾幕を撃ってきたが元々弾を避けるのが得意だから軽く避ける。
仕切りなおしと言わんばかりにフランが二枚目のスペルカードをかざす。
『禁忌「禁じられた遊び」』
どこからか取り出した十字架を投げつけてきた。ただの十字架ではなく十字の延長線にレーザーのようなものが伸びて回転しながら迫っている。そしてそれを連続で投げてきたが何故か速度がやや緩い。だが量があるので一気に追い詰められてしまった。急いで十字架と十字架の隙間を見つけ全速力で通り抜ける。間一髪セーフかと思ったらまた十字架の嵐。これではキリが無い。避けてる最中に気づいたがフランの周りを十字架とともに回っていたようだ。ちょうど一週したと同時に進んでいた方向に投げられた。逆回転させる気なのだろうか。そうはさせない。
『霊符「夢想封印」』
私の周りから追尾する博麗秘伝の光弾が現れる。フランの十字架を砕きながらそれはフランを追い回す。……吸血鬼のスピードをもってしても逃げ切れなかったようだ。光弾はフランを押さえつけた。その姿は「封印」されたかのようだ。
ゆっくりとフランに歩み寄る。もちろん動けるようにするためだ。私の勝利…かな、ギリギリだけど。……ゴソゴソ、パキン。
「フラン、もう動けるわよ。今回は私の勝ちね」
「うぐぐー……」

見た目相応の可愛らしさと負けたという悔しさが入り混じった表情を浮かべた。ちょっと涙目になってる気もする。
「隙アリー！！」
「なっ！？」
ぎゅぅぅ…
「疲れちゃった、このまま霊夢の背中で寝させて……すぅ……」
私の言葉も聞かずに寝てしまった。
「ふふっ、仕方ないわね…」
可愛らしい寝息を立ててぐっすりと眠る少女を背負い、ベッドのある別室へと向かった。

「ふふ、フラン様はやっぱり霊夢がお気に入りのようですね、お嬢様」
「うぎぎ……霊夢は私のものなのに…ぐすっ…」
レミリアが嫉妬してその後泣いていたのは咲夜以外誰も知るものは居なかった…。

（後書き）

仲の良い（と一方的に思っている）人のために書かせていただきました！

ツェペシュさん誕生日おめでとう！！これからもよろしくね！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3166z/

霊夢とフランのお遊戯会

2011年12月11日00時59分発行